



私の仕事  
komachi's point

所員のみなさんと。堀田所長(前列左)と仕事をするのはこれで2現場目だ。

輝け!

けんせつ小町

# 現場監督

富塚友香

㈱フジタ津田沼24P作業所



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

再開発が進む千葉県習志野市奏の杜。その一角にある集合住宅建設の現場に今号の主演はいる。職人や現場事務所の所員をまとめ、時には施主やエンドユーザーの対応も担う。工事主任として所長の右腕となり活躍する現場監督を紹介する。



## ものづくりより設計が好きだった学生時代

富塚友香は一九八四(昭和五十九)年、北海道札幌市生まれ。部屋の模様替えが好きでインテリアに関心を持っていた少女は高校に入り、もっと大きいものをつくりたいという気持ちが芽生え、大学は迷わず建築学科へ進んだ。

「自分たちで設計して施工管理も行う、ものづくりを重視した大学だったんですが、友人と構想を練って設計コンペに参加することの方が好きでした」

設計からものづくりへ路線変更したきっかけは何だったのか。  
「自分の手で、建物をつくりたいという気持ちが大きくなったからです。誰かの手で形になるのではなく、自分が携わりたい」と

それからはゼネコン(総合建設業)の現場監督に絞って就職活動を行った。富塚が活動していた二〇〇六年当時は、女性を技術者として採用する企業はまだそれほど多くなく、エントリーシートさえ受理してもらえないこともあった。

「㈱フジタは女性の採用を積極的に行っていて、適性があれば男女問わず採用します、という雰囲気だったんです。なので『とにかく現場に出たいので雇ってください!』というオーラを全面に出していました(笑)」

富塚の熱意が伝わり、めでたく㈱フジタに入

社。その一カ月後には現場配属が決まり、女性現場監督としてのキャリアがスタートした。

## 自分がいなければ工事が進まないという気概

最初に配属されたのは新宿にある高層マンションの現場だった。北海道の実家を離れ、初めての寮暮らしをしながらの新生活に苦労はしたものの、仕事に行くことが楽しくて仕方がなかった。

「二年目はコンクリート工事、二年目に鉄筋工事を担当していたんですが、自分が準備を万全にして、仕上がった場所を検査する。そうしないと工事が進まなくて、鉄筋屋さんが困ってしまうんだと、その頃は思っていましたね」

現場では見ることもやることも初めて経験することばかり。学生時代の知識で活用できることは微々たるものだった。工夫をしながら工程通りに工事を進め、次の工程となるコンクリート打設にバトンを渡していく。現場の歯車の一つを自分が担っている、そんな気概にあふれていた。

その後もマンションや小学校の建設現場で経験を積んだ富塚は、六年目で地元・札幌の内装工事の所長を務めることになる。

「当社ではめずらしい、飲食店の内装工事の仕事でした。もともとインテリアからこの業界に興味を持ちましたし、思い出深い現場です」



内装の下地確認をする山根職員を監督する富塚。「私が重いものを運んでいると、山根はすぐに駆けつけてくれます(笑)。頼りになるんです」(富塚)。

私の  
こだわり  
komachi's  
point



右/扉の取り付けがうまくいっているか各部屋を確認して回る。  
左/所員たちが相談を持ち掛けることもしばしば。「私が判断できないときは所長に相談します」(富塚)。

## 「建物とエンドユーザーさんの笑顔をつくる仕事」

今まで所長や先輩が対応していた、施主や設計者との打ち合わせを自らやらなければならぬ。一つの工種を任せられていたときは異なり、現場全体を俯瞰する責任感が芽生えた。「全部自分が動いて決めなければならぬので、所長を経験して意識は変わりましたね。すべてが自分事になりました」

### その日のことを進める立場から 先のことを考える立場へ

十年目となった今、富塚は集合住宅の現場で工事主任を務めている。担当工種を一生懸命にやっていた時期からまた一歩ステップアップをし、現場を取りまとめる立場へと業務内容も変化してきた。六名いる所員の相談に乗ったり、施主との打ち合わせに参加する役割も担っている。「担当工種を持っていた頃は、その日の予定を終わらせて、工程に間に合わせようとかにか必死でした。でも今は先のことを決めていく

立場になって、仕事の物差しが一日単位ではなくなったので、少し余裕が出てきたのかなと思います」

富塚と仕事をするのは浅草のマンションの現場に次いで二現場目だという堀田所長はこう話す。

「前は富塚が四年目のときでしたが、自分の気持ちに正直なところはそのままですね(笑)。ですが、部下をみながらも自分の職務もしっかりこなせていますし、以前に増して責任感も強い。成長を感じます」

### 性別じゃなく「やりたい」という 気持ちを持つこと

これまで八つの現場を経験した富塚だが、立場が変わっても心の底にある気持ちは変わらないうという。

「なにもないところからどんどん建物ができて完成した時の達成感と、内覧会でお施主さんやエンドユーザーさんが嬉しそうにしている笑顔を見ると、またその気持ちを味わいたいという思いが沸き上がります」

またやりたいと思う気持ちがあがって、今がある。

富塚の同期には四名の女性現場監督がいた。内勤になった者もいるが、新入社員時代から、現場勤務の不安や課題を四人で相談しながら乗り越えてきた。

私の  
仲間  
komachi's  
point



上/現場全景。左右併せて2棟84戸の集合住宅になる。  
下/休憩中の職人たちに声を掛けたりと現場の雰囲気づくりも欠かせない。

### komachi MEMO

「ネイルはいつもしています。お施主さんに『季節に合わせていますよね、やっぱり女の子ですね。次どんなのをされるのか楽しみです』って言ってもらったので、コミュニケーションの1つにもなっています(笑)」



profile

とみづか・ゆうか◎1984 (昭和59)年、北海道生まれ。建築学科を卒業後、2007年4月に(株)フジタ入社。数々のマンション建設に携わり、2013年1月より札幌にて飲食店の内装工事の現場所長を務める。同年10月、現在の再開発の集合住宅建設の現場に着任。2015年6月より同現場で工事主任として活躍中。

以前、小学校の建設現場で一緒になった職長と。足場の解体作業現場を巡回し、鷹の職人たちに不安全行動がないかを確認することも富塚の業務のひとつだ。

「結婚して子育てをしながら現場で働いている同期もいます。今はトイレや更衣室など現場の設備も充実していますし、女性も入職しやすくなっています。ただ、最終的に性別は関係なくて、本人の『やりたい』という気持ち次第だと思っんです」

男性であっても「やりたい」気持ちがあれば続かない。たとえ辛くても「やりたい」気持ちがあれば頑張れる。体力面を理由に現場を離れる女性もいるが、富塚はこれからでもできれば現場で働き続けたいと考えている。

「確かに体力的に辛くなってきているので不安もありますが、今では私が動いていると『僕がやります！』と部下が駆けつけてくれるんです。もちろん所長のサポートは率先して私がいますけどね(笑)」

不安を隠しながらも前を向いて明るく笑ってみせた。そんな頑張り屋の富塚が次に手掛けた現場とは。

「小学校の現場ですかね。以前に旧校舎で勉強する生徒さんたちの横で施工をしたんですが、始めから携わることができなかったの。マンションとは使う材料も違いますし、内装も可愛らしいものが多くて仕上げがとても楽しみなんです」

校庭で元気よく駆け回る小学生たちの安全を確保しながら、現場で仕事に励む数年後の富塚所長の姿が目に見えかけた。